



バスケットへの愛

長崎県立長崎西高等学校スポーツ国際交流員
Christine Wegner
クリスティン・ウェグナー

「スポーツは、世界を変える力を持っている。人々を団結させる特別な力を持っている。青少年に彼らがわかる言葉で話しかけ、そして、あらゆる差別を笑い飛ばす。」ネルソン・マンデラ

スポーツ国際交流員になるために日本総領事館で行われた面接では、日本の文化や言葉がわからなくても日本でバスケットボールのコーチになれるという思いを示すため、上記の名言についていろいろと話しました。面接官の方には、私が指導するであろうチームについてあまり教えてもらえませんが、私は、スポーツという共通点が言葉や文化を超えられると、強く訴えたのです。出発前の準備はあまりできないまま、もともとアメリカで考案されたスポーツだから全く知らない外国でもうまく指導できるはずだと、とにかく信じることにして、1カ月後に日本へ出発しました。そして、日本にやって来て、長崎県立長崎西高等学校の体育館に初めて足を運び、練習中の生徒たちと初対面しました。37人の生徒は練習する手をしばし休めて、そこで一人ずつ挨拶をしてくれました。その生徒たちの中には女子が一人もおらず、全員男子だということに大変驚きました。

アメリカでは、女性が男子バスケットボールチームのコーチを務めることは、大変珍しいことです。確かにスポーツ界では男子チームを指導する女性コーチの数は著しく増えていますが、バスケットボールだけはなぜか例外です。高校および大学レベルの男子バスケットボールチームでは、女性コー

チが全コーチの1%に満たないのです。男性には男性のコーチ、女性には女性のコーチ、という形がバスケットボール界の常識であるがゆえに、男性チームのコーチとして応募する女性はほとんどいません。

私の考え方もその常識にとらわれ、男子チームのコーチとして本当に成功できるかと、かなり心配になりました。ニューヨーク市ブルックリン区の小学校で週2回バスケットボールの指導をした以外には、男子を指導した経験はありません。日本語も一言も話せない中、すでに高い評価を得ている男子高校生チームは正直無理かとも思いました。

しかし、そんなことは言ってられません。もう、男性だろうが女性だろうがそんなことは気にしないと決心しました。日本語の勉強に一生懸命挑むことにし、日本がバスケットボールというスポーツをアメリカから輸入したときに、用語そのものも大半はそのまま英語を借用していることに救われ、だんだん話せるようになってきました。



Korea [韓国] 大韓民国仁川市コンクック大学の監督と

月日が流れるにつれ、私は布の繊維のように徐々にチームに溶け込んでいきました。私がアメリカでの自分の経験から培った独自の基本練習方法やプレイがだんだん使われるようになりました。大会やさまざまな練習試合等での移動を通じて、選手やほかのコーチ、保護者と交流する時間を得ました。これは、日本に来た外国人にはなかなか経験できないことだと思います。来日から8カ月後、チームとして1週間韓国へ行きましたが、そこでは、韓国のコーチの片言の英語を私の片言の日本語に直すという役割も果たしました。

その夏の全国大会では、これも私がアメリカから持ってきた方法ですが、生徒たちと一緒に対戦相手を偵察しました。その大会ではベスト16へ進み、1ポイントの差でベスト8に進めませんでした。1勝ごとにともに笑い、ともに喜びました。負けて、ともに泣きました。帰りは埼玉から新幹線に乗り、



Winter Cup「ウィンターカップ：ベスト16」クリスマス時期に毎年東京で行われる全国高等学校バスケットボール選抜大会にて

日本の美しい景色を見ながら、日本にやって来てからそろそろ1年間になることに気づきました。そしてまた、その1年の間、私は、男子チームの女性コーチとしてではなく、単にコーチとしてやってきたことにも気づきました。

3年経って、家にいるようなくつろぎを感じています。体育館で最初に会った生徒たちはみな卒業しましたが、多くが大学でバスケットボールを続けています。現在教えている生徒については、練習初日から指導を担当し、また中学校時代からプレイを見て引き抜いた生徒も少なくありません。一人ひとりとの関係を大切に築いてきましたので、質問や要望等があればすぐに尋ねに来てくれるのです。

しかし、楽だったなどと、どうかお考えにならないでください。非常に難しい日もたくさんありました。初めて日本に住むことになった外国人はもちろん、10回目の訪問でさえ誰でもそういうでしょう。

また、コートの外側で作戦を練ったり、長崎弁で大声で指示を出したりしている、選手の半数より背の高い赤い髪のガイジンに対して、相手チームや応援に来ている人たちは間違いなくとんでもない違和感を覚えているでしょう。しかし、私はそういった違和感をち



Practice Game「練習試合」西高の体育館にてハーフタイムにセンターと戦略を練る様子

っとも感じていません。生徒をはじめ、保護者、教師、応援の人たちを含む長崎西高の男子バスケット部というコミュニティの一員に、私は過ぎません。ほかに共通点はないかもしれませんが、チームというものによって特別につながっているのです。

日本に住み、未知の世界について、いろいろと学んできました。しかしながら、日本での経験によって、すでに知っていると思っていたことも実はそうでなかったと気づきました。私は、あらゆる障害を超えるという「スポーツの力」を見ただけではなく、「スポーツの力」そのものを日本に来て経験することができたのです。スポーツという言葉によって、人と人がつながり、自分でも気づかなかった固定観念や偏見を打ち破ってくれました。3年間、故郷から約1万1千km離れた国に住み、37人の素晴らしい生徒とともにバスケットボールをやってきた今、地球の裏側の面接会場で、またそれはるか昔のことのようにはるかに思いますが、大胆に言い放ったその名言の真の意味をやっと理解できるようになったのではないかと感じています。



アメリカ合衆国東北部コネチカ州出身で、長崎県立長崎西高等学校男子バスケットボール部スポーツ国際交流員(SEA)をしています。今年8月で4年目を迎えました。2009年からは、AJET全国役員会のSEAおよび英語を母国語としない者の代表をしています。チャリティ募金活動などをする長崎国際女性の会の会員でもあります。趣味はバスケットボール(長崎地区教師チーム所属)と旅行。

Christine Wegner



スピニングの思い出

佐賀県白石町立白石中学校外国語指導助手
Christopher-Michael Daeley
クリストファ・マイケル・デーリー

DJ技術とは、2つの異なる曲を合わせ、新しいものを作り出すということです。2つの曲の違いが大きければ大きいほど、それらを一体化させることはますます難しくなりますが、その結果新しい曲が素晴らしいものになります。意外にも、このDJ技術は、私が白石でJETとして勤めている経験と類似しています。つまり、来日する前と日本での経験を新しい生活のリズムとメロディと混合させ、音楽という媒体がこの過程を浸透し、つないでいるのです。私は、音楽を通して母国の文化を地域社会と共有することができると同時に、音楽のおかげで出会えた人々のユニークな調和の記憶を刻み込んでいます。

もし私の記憶がターンテーブルだったら、ある特別な思い出をプレイするでしょう。近隣の武雄市であった職場の宴会から帰る際、私は自宅まで車で送ってもらう必要がありました。幸い、学校の便利屋、管理人、技術のスペシャリスト（彼の職

務内容のリストに終わりはなさそう）であるモロイシさんの奥さんが車で迎えに来てくれるので、私も一緒に乗せてもらえることになりました。

ロビーで奥さんの迎えを待っている間、我々はお互いの言葉で喋れる限りの会話能力を使い果たしたので、残りの15分間を黙って過ごすことを余儀なくされた時、彼は携帯電話を取り出しました。彼は私に、奥さんとお嬢さんの写真を何枚か見せてくれた後、一息ついて、「ピンクフロイドは好きですか?」と聞いてきました。私は後ろに倒れそうになるほど驚きました。彼らの「狂気」(Dark Side of the Moon) というアルバムの「Us and Them」という曲が、私の彼女との初キスのBGMだったからです。私の一番お気に入りのアルバムは「アニマルズ」(Animals)であり、「ザ・ウォール」(The Wall) は、物語を伝えるマルチメディアでの最高傑作だと考えています。セレンディピティ（幸運）は、私を来日から6カ月目の時に出身地から5,000マイル(8,046km!)も離れたある温泉のロビーに導き、そこでの些細なやりとりがこの先何週間も続く会話の始まりでした。元気になった私

は、限られた日本語能力を尽くして、曲名とアルバム名の助けを得ながら、2人の一番好きな曲やギターソロ、「ザ・ウォール」のシーンなどを細切れの情報をつなぎ合わせながら話をしました。

奥さんが到着し、モロイシさんは私の好きなピンクフロイドの曲



2009年佐賀国際バルーンフェスタに、熱気球が会場に戻っている



桜の花にとまっているミツバチ

を全部流しました。私とモロイシさんの「Shine on You Crazy Diamonds」という曲の演奏が、佐賀県中とかわいそうな奥さんの耳に響きわたり、言語の壁は崩れ、ある武雄の温泉に残されました。

リスクテイキングは、DJと海外での生活の結果として生じるものです。ダンスフロアでは相違点を無視し、リズムのユニティーは新しいものを受け入れるリスクに値します。2010年の春、私とALTの友だち数名は、セントラルパークという唐津市民にはほとんど知られていないレストランを偶然見つけました。そこは、多くのダンスクラブより広いスペースに、プロジェクター、楽器、漫画コーナー、鉢植えの木があるユニークなレイアウトでした。そのオーナーは顧客を呼び込む方法を必死に探しており、同時にDJである私の友人は自作の音楽を唐津の市民と共有することができる場所を探していました。

その後、数回セントラルパークに出向き、綿密な計画作りと激しいプロモーション活動の結果、唐津初の国際DJイベント“Funktion”が誕生、セントラルパークは一晩だけダンスクラブに変化しました。その晩、ニュージーランドやアメリカなど遠方からの来日したDJが、ハウス、ブレイクビーツ、ヒップホップ、エレクトロニクスやレゲエなど、普段あまり聞くことのない音楽を紹介し、また今まで自分たちの持っているスキルを披露する機会がなかった地元の日本人DJたちが客に紹介されました。最初のクラブナイトは200人以上の客を集め、その後Funktionは月1回のイベントになり、開催するたびに新しいDJと客を迎えています。

リミックスを作曲する際にDJが加える新たなものが、そのDJのシグネチャーとなり、その曲を永遠に変えます。それと同じように、思いも寄らない出来事が私の人生を永遠に変えたのです。それは、私の日本人のお兄さんに出会ったことです。私とツンは、出会ったその瞬間から、バンドの話や延々としたのです。パンクバンド、スカバンド、ジャズバンド、レゲエ、ブルース、ヒップホップ…。また、アメリカ、日本、中国、韓国、オーストラリア、イギリス、ジャマイカのバンドの話もしました。目まぐるしいペースでコンサートやミュージックフェス

ティバルを一緒に見に行ったことから、自然な成り行きでバンドを組むことになりました。音楽はツンが英語を習うひとつのインスピレーションであったため、彼は英語と日本語両方

を使って作詞をし、時々私に助けを求めてきましたが、その必要はほとんどありませんでした。彼は信じられないほど才能のある作詞家であり、本人は気がついていないようですが、詩に出てくるような言葉でよく話すのです。

長崎のSky Jamboreelに行く道中、ツンの彼女であるケイコが、ネックレスをなくした話を始めました。ツンは、“When I lose something, I just say it took my bad luck.”（僕は何か物を失くしたら、それが僕の悪運を持ち去ってくれたと思う。）と答え、これが私の一番好きな引用句となりました。最近、私は来年日本を離れることになるかもしれないと彼に伝えました。その時の彼の返事は非常に美しかった。“I don't need to say what I think. I know the day will come. I'll never become used to saying goodbye...”（僕が思っていることを言う必要はない。そういう日が来るということは知っている。さよならを言うことは、決して慣れるものではない。）

レコードが次の曲に飛んでしまう…。詩、音楽。最後のこの曲は悲しい曲ですが、今までの経験と同様、すべての音符には、日本と特に私のお兄さんであるツンのシグネチャーがあるのです。



事務室の松本さんと3年生と一緒に
ずこ寿司を作った



アメリカ・ワシントン州ベリングハム市出身で、佐賀県白石市の3年目のALT。沖縄に5年間住んで帰国した後、JETで日本に戻ることを大変楽しみにしていました。音楽、美術、料理が好きで、ALTなので英語を教えることももちろん大好き！

Christopher-Michael Daeley

I Love This Game

"Sport has the power to change the world. It has the power to unite in a way that little else does. It speaks to youth in a language they understand...it laughs in the face of all types of discrimination."

-Nelson Mandela

At my embassy interview for the position of Sports Exchange Advisor, I summoned this quote to help me explain how, even though I was familiar with neither Japan's culture nor language, I would be able to coach basketball in Japan. Even my interviewers could provide me with little more than speculation about the team I would be coaching, but I assured them that sport is a common denominator, and transcends language and culture. After a whirlwind month of meager preparation, I took the leap of faith and headed halfway across the world to teach a sport essentially invented in my backyard. I arrived at the gym at Nagasaki Nishi High School to meet my students, who were, naturally as I would soon learn, practicing. They stopped for a moment while I arrived and all 37 of them introduced themselves to me—all 37 BOYS.

In the United States, to say that a woman coaching a boy's basketball team is a rarity is an understatement. Although the number of women coaching boys or men in across a spectrum of

sports has been growing considerably, basketball has somehow fallen outside the statistic, and the number of female coaches at either the high school or college level is less than one percent of all coaches. For this reason, it is rare for women to even *apply* for such jobs, simply because it is still the status quo that men coach, and women coach women.

Admittedly a product of such a school of thought, I had reservations about my chances for success. My minimal experience coaching boys, amounting to running a basketball clinic twice a week at an elementary school in Brooklyn, would do little to prepare me to teach an already successful high school team in a language I couldn't speak at all. So, I decided not to think about the gender difference. I focused all my energy on learning enough of the language to slowly convey my ideas. It helped, of course, that when Japan imported basketball from the United States, they also imported a large portion of the words we use in English, making for a swifter transition than had I been trying to a traditionally Japanese sport.

As the months past, I was woven into the fabric of the team little by little. They adapted some of drills and plays I brought with me from my own experience. Travelling a considerable amount for various practice games and tournaments, I had a

Spinning Memories

The art of DJing involves merging two different songs into a new composition. The more noticeable the difference the greater the challenge to unite them, and often, the more remarkable the new song becomes. Surprisingly, this process has paralleled my time working for the JET Programme in Shiroishi. In effect, I've found myself mixing my experiences before and during Japan into the rhythm and melody of a new life, with the medium of music being what has permeated and connected them. Music has allowed me to share the most cherished aspects of myself and culture with my community, while simultaneously imprinting my memory with the unique harmonies of the new people I've been blessed to encounter.

If my memory was a turntable, one special incident would be on instant replay. At the end of an office party in nearby Takeo, I found myself in need of a ride home. Fortunately, Moroishi san, the school's handyman, custodian, groundskeeper, and technology specialist (his list of duties and skills seemed endless) was being picked up by his wife and offered to bring me along. While waiting in the lobby we had all but exhausted our limited ability to communicate in the others' native language, and as we were about to resign ourselves to 15 minutes of silence, he took out his cell phone. After showing me a few pictures of

his daughter and wife, he paused, and said, "Do you like Pink Floyd?" I almost fell backwards, amazed at the circumstances. My girlfriend and I had our first kiss to the song "Us and Them" from *Darkside of the Moon*. One of my all time favorite albums is *Animals*. I consider *The Wall* to be one of the most successful pieces of mixed-media story-telling EVER. Serendipity had brought me 6 months and 5000 miles away, to the lobby of an onsen where just as one conversation was ending, one that could continue for weeks was about to begin. Invigorated, I pulled every last bit of Japanese I could from my meager supply, and aided by song and album names, we scratched together a mix of each other's favorite songs, guitar solos, and scenes from *The Wall*. When his wife arrived, Moroishi san proceeded to play, in order, every single one of my favorite Pink Floyd songs. The streets of Saga Prefecture and poor Moroishi san's wife's ears echoed with our rendition of "Shine on You Crazy Diamonds" and what was left of the language barrier lay crumbling in the lobby of a Takeo onsen.

Risk-taking is another corollary to both DJing and living overseas. On the dance floor, differences are set aside and the unity of rhythm is worth the risk of opening yourself up to something new. In early Spring of 2010 some ALT friends of

Christine Wegner

chance to interact with the players, parents and other coaches in settings not seen by a lot of foreigners who come to Japan. Eight months after I arrived, we went to South Korea for a week, and I acted as interpreter, translating the Korean coaches' broken English into my broken Japanese.

That summer at Nationals, my students and I scouted the opposition together (another concept I brought with me from America), and made it to the Sweet Sixteen, missing the Elite Eight by a single goal. After each win, we laughed and celebrated together. After we lost, we cried together. As we returned home from Saitama via Shinkansen and I soaked in Japan's beautiful landscape, I realized I had been in Japan almost a year. I also realized, for the past year, I had not been a woman coaching a boys' team. I had been, simply, a coach.

Three years later, I feel at home. The students that I met on that first day have now all graduated, many of them still playing in college. The students I teach now I have seen from their first day of practice, and in many cases even earlier, recruiting them out of junior high school. I have cultivated relationships with all of them, and most don't hesitate to come to me when they have a question, or even a suggestion.

Not to say that there have not been difficult moments. Anyone coming to live in Japan for the first time or even the 10th time will tell you that. And I am sure that my presence on the bench causes a stir for opposing teams or fans—the red-headed gaijin, taller than half her players, drawing up plays on the sidelines and yelling in Nagasaki-ben. But from the inside looking out, I don't feel the oddity. I am, simply, another proud member of the community of students, parents, teachers, and fans that make up the Nagasaki West Basketball Team. And while we may have little else in common, the team connects us in a way that little else can.

Japan has taught me volumes about a world that I had little knowledge of. But it also taught me something I thought I already knew. I haven't merely witnessed the transcending power of sport: my experience is a reflection of it. The language of sport finds commonality among all of us, and it helped me break through stereotypes and prejudices I didn't know I had. Three years, almost 7,000 miles, and 37 amazing students later, I think I now truly understand the quote I so boldly offered half a world away and what seems like a lifetime ago.

英語

Christopher-Michael Daeley

mine stumbled upon Central Park, a restaurant that was almost completely unknown to the people of Karatsu city. It was more spacious than many dance clubs, with a unique layout featuring a projector, musical instruments, a manga corner and even trees scattered around. The owners were desperately seeking a way to bring customers in, while my friends—who happened to be DJs—were looking for a place to share their music with the people of Karatsu. After a few more visits and some heavy planning and promotion, Karatsu's first International DJ Event: "Funktion" was born, and Central Park metamorphosed into a dance club for one evening. That night people were introduced to House, Breakbeat, Hip Hop, Electronic, and Reggae music that they may never have heard otherwise, by DJs from places as far away as New Zealand and America, as well as local Japanese DJs who had yet to have an opportunity to showcase their skills. That first night brought in over 200 people and since then, Funktion has become a monthly event, with new DJs and visitors showing up each time.

When constructing a remix, the additions a DJ makes to a song are what leave their signature and change the song forever. In the same way, my life has been changed by the unexpected addition of a Japanese brother. From the first moment Tsun and I

met we talked about bands, bands, bands. Punk bands, ska bands, jazz bands, reggae, blues, hip hop... We talked about bands from America, from Japan, from China, Korea, Australia, England, Jamaica. It was a natural progression that amidst the whirlwind of concerts and music festivals we saw together, we would form a band. Because music was one of Tsun's inspirations to learn English, he writes songs in both English and Japanese and while he sometimes asks for my help, he rarely needs it. He is an incredibly gifted lyricist, and often speaks in poetry without realizing it. On our way to Sky Jamboree in Nagasaki, his girlfriend Keiko told a story about a necklace she had lost. Tsun responded with one of my favorite quotes of all time, "When I lose something, I just say it took my bad luck." Recently, I told him I may have to leave Japan after this year. His response was brutally beautiful, "I don't need to say what I think. I know the day will come. I'll never become used to saying goodbye..."

The record skips... Poetry. Music. This last song is a sad one, but like the others, every note bears the signature of Japan and especially, my brother, Tsun.

英語